

た。ズンネとわかれてホテルに戻ると、かの測量士バンダハカル氏が待っていてくれた。22才の青年の父親と私が同年だというので一驚もしたが、なかなか弁のたつ面白い青年であった。「日本はトランジスターラジオやカメラを世界に輸出しているが、インドはその哲学を輸出している」などという。彼はお土産に線香と紅茶を一箱くれた。ダーズリンへの独り旅は、全く気持の好いことの連続であった。今でも思い出すごとに、心の和む感じがする。

## エベレスト飛行

正井泰夫

1968年12月11日、カトマンズより飛行機でエベレスト山を見に行く。8848m、この世界最高峰は今、私の目の前にある。チベットの澄みきった青い空に映えて、青黒い南壁をこちらに向けたエベレスト山がそそり立つ。

エベレストを、現地ではサガルマタと呼ぶ。有名なクンプ氷河は、手前のローツェ・ヌブツェなどの高峰の裏にあって見えない。たくさんの8000m前後の高峰に囲まれて、エベレストは青黒くそびえている。

飛行機から見たエベレストは、これがあのように何日も歩かなければならない山とは思えないくらい、むしろ平凡にさえ見える。近代文明は、人々の素朴な感激を押しつぶしてしまうことが多い。今、眼前に展開するエベレストは、近代文明の産物である飛行機から見ているにもかかわらず、恐ろしく強烈な感激をもって追ってくる。

操縦席から見たエベレストの展望と、この偉大なクンプヒマール山脈のパノラマは、恐らく終生忘れることができないだろう。しばらく前まで旅をしていたインド亜大陸の、あの赤茶けた瓦礫の世界とは、この白銀のヒマラヤは何と異なっていることか。ヒマラヤの多くの高峰が、ガネシュヒマールとか、アンナブルナとか、ドルジェとか、ヒンズー教やその他の宗教の神様の名前をもっているものもなづける。

クンプヒマール一帯の氷河の末端は、所によっては4300m辺まで下っている。しかし、大部分は4600m以上で、5000m以上のものも多い。氷河の下半分は、土砂や礫をたくさんかぶっており、上半分の真白な姿とは大違いである。

クンプ氷河の辺では、海拔5000m辺まで、現住民の集落がある。ロブチェ4930m、ゾンラ4843m、ツォロオグ4665m、ドッグラ4620m、チュクン4730mというように、U字谷の谷底に小集落が点在している。アンデスとともに、世界における居住の高距限界なのだ。

何年か前、テレビを偶然見ていたら、ヒマラヤの雪にとざされた中にあるジャングリアとかジャングレラとかいう仮想の王国の物語りを、宝塚の何とか組がやっていた。確かに、ネパールといい、シッキムといい、またブータンやカシミールといい、ヒマラヤの山中には、風景も文化様式も、私たち日本人にとっては、恐ろしく異国的な世界がある。

空には飛行機が飛び、カトマンズには近代的ホテルの建設が進められているといっても、ネパールの大部分は昔ながらである。人々は徒歩で何日もかかって旅をする。1週間や2週間歩くことは、帰省する大学生にとっても、山と平地の物産を交換するキャラバンにとっても同じことである。

しかし、飛行機から見たヒマラヤの山々は、そんな生活が本当にあるのだろうかと考えさせる。あまりにも速く、あまりにも便利だからだ。でも、バクタプールの街はずれなどで、多くの人が天秤棒をかつきながら歩いているのを見ると、そこにはまだ過去が生きているのを、この目で見ることができるのだ。

## キ ャ ン パ ス の 花

貝 山 久 子

先日、会計課へ行った帰りに家政学部の校舎の前を通ると、沈丁花のつぼみが大分ふくらんでいるのが目についた。ここの沈丁花は校内のどの沈丁花よりも早く開花し、かつ美しい。思うに陽当りのよい校舎と、舗装道路の輻射熱をうけるからであろう。それに較べてあわれを止めているのが別館前の沈丁花である。昔は手入れが行き届いて、おびただしい花をつけたものであった。そうしていつも3月25日の卒業式のころにはまっさかりであったように思う。卒業生の謝辞にも、在校生の送辞にもこの花のことが冒頭に出て来たものであったが、やはり戦後次第に東京が温暖になって来ているのであろう。家政学部が建つ前は、ここにキャラメル廊下と呼ばれる渡り廊下があって、その外には数本のこぶしの大木が、雪のような、としか形容のしようのない花をもりあがるようにつけた。それが入学式のころで、白い花の下で何とはなしにふるさとを思ったものである。こぶしは花のあとの若葉の美しさが又すばらしかった。グランドの中程に一株の連翹があって早春の日あざやかな黄色の花を開く。はじめて上京した年ゆくりなくこの花をみて、一どきに望郷の念にかられて涙ぐんだのを思い出す。少女時代をすごした朝鮮では、長くて寒い冬の沈黙を破って春のおとずれをもたらすのはこの花で、それを追って桜も梅も桃も李も一せいに咲いたものであった。木蓮は高校の裏とプールの脇にある。こぶしのにぎやかさにくらべて、ひっそりといつの間にか咲いて、いつの間にか散ってしまう。現在の理学部、昔の体育館の裏に乙女権が沢山並んでいた。あまり好きな花ではなかったが七重八重のピンクの花が、つやつやした